

令和8年7月27日(月)
しなやかに生きる子ども



2学年 生活科
「つくって ためして」

「頭の上からやさしく放すと、ふわっと飛ぶよ。」

生活科では、対象とのかかわりを通して、自分のよさや学びの手応えをつかんでいく子どもの姿を目指します。本実践では、紙飛行機を題材に様々な折り方や飛び方が試せる学習活動を設定し、多様な姿が表れるようにしました。授業では、ふわふわ飛んだり、ブーメランのように返ってくるように飛んだりすることに面白さを味わい、自分の好きな飛び方を見付け追究しました。また、他者と一緒に作ったり、飛ばしたりできる環境を整えることで、「〇〇さんみたいに、もっと飛ばしたい。」「〇〇くんの折り方って、自分と違うな。」などと、ゆるやかなつながりが生まれるきっかけをつくりました。こうして子どもは、小さな成功体験を積み重ね、「私はふわふわ紙飛行機名人になったよ。」と、自分自身や学びに自信を付けていきます。

私たちは、自分の意思をもって粘り強く学ぶ力強さと仲間の考えを受け入れながら学んでいく柔軟さを兼ね備えた「しなやかに生きる子ども」を育みます。そのために、他者をつながり合い、“楽しい”を見いだす学びを大切にしていきます。多様な個を認め、高め合いながら学べるように「教材化」「教師の立ち位置」の二つの視点から、子ども一人一人を大切にしたい授業の在り方を探っていきます。

生活科 2年「つくって ためして」より

視点1

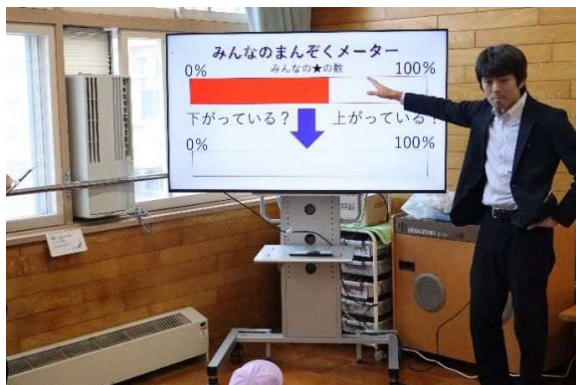
多様な個が生きる教材化

紙飛行機を題材としたことで、折り方や飛び方の違いから、子ども一人一人の興味や得意が表れやすい学習となった。材料を半紙・折り紙・A4用紙など複数用意したことで紙の大きさや形、重さに目を向けながら試行錯誤する姿が見られた。実際に、遠く飛ぶ紙飛行機だけでなく、ふわふわ飛ぶものや、ブーメランのように戻ってくるものなど、子どもたちの「好きな飛び方」を追究する姿が生まれた点は大きな成果であった。また、作り場コーナーや飛ばすコーナーを設定したことで、友達同士で折り方を教え合う場面や、飛距離を競い合う場面が生まれた。友達の飛ばし方を見て「自分もやってみたい。」と意欲を高める子どもの姿も見られ、活動を通して他者とのつながりが広がった。しかしながら、折り方は無限にあるとはいえ、低学年の子どもにとって、発想できる範囲に限界があり、工夫の余地は思ったほど広がらなかったことが課題である。



多様な個が生きる教師の立ち位置

視点2



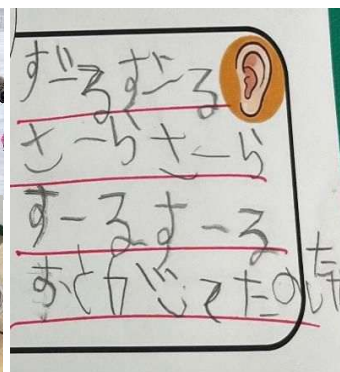
本実践では、活動中に教師が立ち位置を意図的に変えながら関わることで、子どもの気付きの質を高めることができた。教師がインタビュー役となって特定の子どもの活動のよさを言葉にして捉えたり、遊び手として共に活動したりすることで、子どもは自分との違いを意識し、飛ばし方や作り方を比べながら見ることができた。一方で課題として、単元後半において学習の方向性を十分に共有できなかった点が挙げられる。飛び方の追究から遊び方の工夫へと移行する際、これまで大切にしてきた飛び方の価値と次の活動とのつながりが曖昧となり、自分のこだわりを生かし切れない姿も見られた。多様な展開を生かすためには、次の学習へ向かう前に、教師が追究の価値を整理し、方向性を共有する関わりが必要である。

視点1

多様な個が生きる教材化

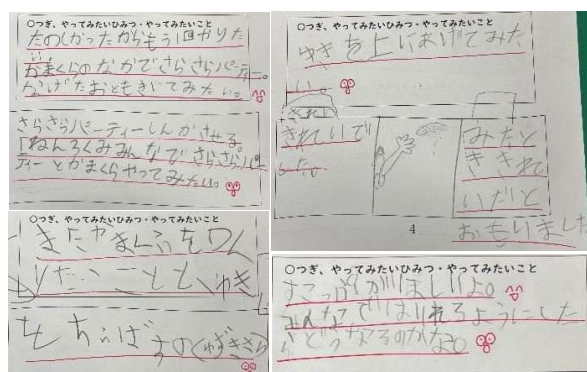
本実践では、雪遊びそのものではなく、雪の状態に焦点化することで、多様な感じ方や関わり方が生まれる教材化を図りました。単元の導入では、教室で人工雪を提示し、目・手・鼻・耳の諸感覚で雪を感じ取る場を設定しました。その体験を基にグラウンドへ出ると、雪の状態が時間や場所によって異なることに気付き、本物の雪のよさを自分の感覚で捉えようとする姿が見られました。

本時では、「本物の雪となかよくなりた。」という子どもの願いを起点に、遊びの様子を動画で振り返る活動を設定しました。動画を通して雪のきれいさや状態の違いに目が向き、「きらきら光っている。」「花火みたい。」と多様な表現が生まれました。また、「こうやって楽しんでいるのかな。」と友達の思いを想像する姿も見られました。雪の状態を媒介に、子どもたちは自分の感じ方を基に関わりを選び直し、友達の見方と出合いながら関わり方を広げていきました。



多様な個が生きる教師の立ち位置

視点2



本実践では、子どもが雪の状態を諸感覚で感じた「言葉」に学びの起点を置く立ち位置をとりました。手で触った感じ、目で感じた美しさなどの雪の状態に関する気づきを、つぶやきやワークシートで表しながら、新しい関わり方を見付けられるようにしました。

本時では、動画提示後に「何をしたんだろうね。」と問いを共有しました。「さらさらしているね、キラキラできれい。」「かまくらをつくっているね、かたい雪が作りやすそう。」といった雪の状態に着目したつぶやきを板書に位置付け、行為と言葉を結び付けました。また、「こうしたかったのかな。」と友達の思いを想像する姿や、「自分もやってみたい。」と関わりを選び直す姿が見られました。子どもたちは友達の姿を手掛かりに、次時の活動への願いをもつことができました。今後は、子ども一人一人の願いがより広がり、新たな関わり方を見出していけるよう、問いの立て方や共有の在り方を工夫していきます。